教職課程センター紀要　第８号　159-165 ページ、2023 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.8 159-165，2023

研究ノート

保健体育教員免許取得希望者の保健授業に対する意識

Attitudes Toward Health Classes Among Applicants for Health and Physical Education Teacher Certification

加藤　勇之助・黒川　康宏
Yunosuke KATO ,Yasuhiro KUROKAWA

Key words:保健体育教員免許取得希望者，保健授業，意識

Ⅰ．はじめに

近年、情報化社会の進展により、様々な健康情報や健康を脅かす恐れのある情報も入手が容易になるなど、子どもの健康や安全を取り巻く環境が複雑化、深刻化している[1)]。子どもが自ら健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習を推進していくため、学校現場における保健授業の役割はより一層重要となっている。しかし、学校教育現場において保健授業が十分に機能しているとは言えないところもある。たとえば、中学校においては保健授業が計画的に実施されず不定期実施型いわゆる「雨降り保健」[2) 3)] になっている小・中学校も存在している。また実際に保健授業を担当する保健体育科教員も体育に比べ保健の方が指導しやすいと感じている教員は少数との報告もある[2)]。中川ら[4)] は保健体育教員の多くがもともと「体育・スポーツ志向者」であり、保健そのものに対する関心が概して低いと述べている。この点は保健体育教員免許取得希望学生にとっても同様の傾向があり、授業実践力に関して体育授業を中心に考えている学生が多く、保健授業については関心が低い[4)]。体育の実技指導は、学生自身これまで所属してきた運動部において、後輩など他者に教えた経験がある者が多く、保健授業より自信をもっているからであろう[5)]。学生にとって保健授業は知識不足に加え、他者に教授した経験はほぼない。教員養成系学部に在籍する学生を対象にした下井倉ら[6)]の報告によれば、自身に経験がないこと、知識が不足していること、能力がないことによって、他者に教授することが困難であるとしている。本学本学科の保健体育教員免許取得を目指す学生においても、これまでの筆者の経験より体育実技指導に比べ、保健への関心が低く、教育実習での保健授業実施について真剣に向き合っている学生は決して多くないと推察している。こうした中で保健授業への興味関心を引き出し、保健授業づくりについて学ぶ科目そのものを充実させていなければならない。

そこで、本研究では保健体育の教員免許取得を目指す 2020 年度と 2022 年度の学生を対象に、教職志望はじめ保健授業や現時点における教育実習での保健授業実施についての自信、中高生時代に受けた保健授業のイメージについて現状把握および今後の大学における教科教育法の課題について検討していくための基礎資料とすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

1．調査時期及び対象者

2020 年度、2022 年度の大東文化大学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科で開講されている教科教育法（保健Ⅰ）履修者（大学 2 年生）を対象にした。質問紙調査を 2020 年 4 月中旬、2022 年 4 月中旬に筆者が担当する授業内で実施した。対象者は 2020 年度が 69 名（男子 44 名、女子 25 名）、2022 年度が 93 名（男子 70 名、女子 23 名）であった。

2．倫理的配慮

調査実施にあたり本研究の趣旨、個人情報の保護、調査結果が研究以外の目的に使われることがないこと、統計的に処理されるため個人が特定されることはないこと、回答の有無によって成績や評価に一切関係するものでないことなどを説明した。その上で回答をもって調査

への同意を得たと判断した。

3. 質問紙調査内容

質問紙調査の内容を以下に示す。山田ら[7)8)]が実施した調査を参考に作成した。

1) 大学卒業後の教職志望について、教員になりたい、今はまだわからない、教員になりたくない、の 3 件法で回答を求めた。
2) 保健授業の重要性について、他教科よりも重要、他教科と同等、他教科ほど重要でない、の 3 件法で回答を求めた。
3) 教育実習での保健授業実施に対する自信について、自信がある、少し自信ある、少し自信がない、自信がない、の 4 段階評定で回答を求めた。
4) その理由について、自信がある・少し自信があると回答した者に対し、教科書を読めばできるから、自分の生活に身近なことだから、自分の経験から教えることができそうだから、中高生時に保健授業をまじめに受けて勉強したから、大学での授業が役に立ちそうだから、の 5 項目を設定し「はい」か「いいえ」で回答を求めた。自信がない・少し自信がないと回答した者に対し、何を教えてよいのかわからないから、保健授業を実施することを考えたことがないから、これまで一度も生徒に保健授業をしたことがないから、中高生時の保健の授業がつまらなかったから、中高生時に保健をまじめに勉強しなかったから、の 5 項目を設定し「はい」か「いいえ」で回答を求めた。
5) 中学校、高校時代の保健授業のイメージについて、保健の授業は自分の生活や生きていく上で必要、保健の授業は雨などで体育ができない時にやっていた、保健の授業はテスト前に暗記するためにやっていた、保健の授業を通して自分と向き合うことができる、保健の授業ではビデオなど視聴覚教材を見て学習できた、保健の授業ではグループ学習を通じて友達の考え方などを知ることができた、保健の授業は寝ている人が多かった、保健の授業はほとんど何をやったか覚えていない、保健の授業で先生の体験談など聞かせてくれた、保健の授業は先生が何となく面倒そうにやっていた、保健の授業は楽しかった、保健の授業はつまらなかった、12 項目を設定しイメージに近い場合「はい」、イメージとかけ離れている場合「いいえ」で回答を求めた。

4. 分析方法

はじめに各年度において男女の回答比率に差があるかを確認した。その結果、差は認められなかったため、男女合わせ 2020 年度と 2022 年度の回答比率についてクロス表を作成し、$\chi 2$ 検定を実施した。有意差が出た場合、特徴がある箇所を確認するため調整済み残差を求めた。使用した分析ソフトは IBM SPSS Statistics バージョン 26 を使用し、有意水準 5%とした。調整済み残差は絶対値 1.96 以上の箇所について検討した。

Ⅲ. 結果

1. 大学卒業後の教職志望について

大学 2 年生 4 月の時点で、大学卒業後に教職に就きたいと考えている学生は、2020 年度、2022 年度それぞれ 29 名（42.0%）、44 名（47%）であった。わからないと回答した学生は 35 名（50.7%）、46 名（49.5%）あった。この時点ですでに教員になりたくないと考えている学生も少数おり 5 名（7.2%）、3 名（3.2%）であった。回答比率に有意な差は認められず、教職志望意識に変化がないことが明らかとなった（表 1）。

表１　大学卒業後の教職志望

	総数	2020年度（69人）		2022年度（93人）		χ^2検定
		度数	%	度数	%	
なりたい	73	29	42.0%	44	47.3%	
わからない	81	35	50.7%	46	49.5%	NS
なりたくない	8	5	7.2%	3	3.2%	

NS：not significant.

2. 保健授業の重要性について

保健授業の重要性を他教科と比べどのように考えているかについては、他教科より重要と考えている者は2020年度、2022年度でそれぞれ21名（30.4%）、14名（15.1%）であった。全体としての回答比率に統計的な有意な差は認められなかったが、調整済みの残差より2020年度は他教科より重要と考えている割合が大きく、2022年度はその割合が少ない傾向があった。さらに他教科と同等であると考えている割合は、2020年度は少なく、2022年度は多い傾向にあった（表2）。

3. 教育実習での保健授業実施に対する自信について

教育実習に行った際、保健授業を実施することに対しての自信については、回答比率に有意な差が認められた。あると回答した者は2020年度が0名、2022年度が4名（4.3%）であった。少しあると回答した者はそれぞれ16名（23.2%）、10名（10.8%）であり調整済み残差より2020年度はその割合が多く、2022年度は少ない傾向にあった。少しないと回答した者はそれぞれ37名（53.6%）、44名（47.3%）とどちらの年度も約半数いることが明らかとなった。ないと回答した者はそれぞ

表2　保健授業の重要性

	総数	2020年度（69人）		調整済み残差	2022年度（93人）		調整済み残差	χ^2検定
		度数	%		度数	%		
他教科より重要	35	21	30.4%	2.4	14	15.1%	-2.4	
他教科と同等	111	41	59.4%	-2.1	70	75.3%	2.1	NS
他教科ほど重要ではない	16	7	10.1%	0.1	9	9.7%	-0.1	

NS：not significant.

表3　教育実習での保健授業実施に対する自信

	総数	2020年度（69人）		調整済み残差	2022年度（93人）		調整済み残差	χ^2検定
		度数	%		度数	%		
ある	4	0	0.0%	-1.7	4	4.3%	1.7	
少しある	26	16	23.2%	2.1	10	10.8%	-2.1	P＜0.05
少しない	81	37	53.6%	0.8	44	47.3%	-0.8	
ない	51	16	23.2%	-2.0	35	37.6%	2.0	

表4　教育実習での保健授業実施に自信がある者の理由

	総数	2020年度（16人）		2022年度（14人）		χ^2検定
		度数	%	度数	%	
教科書を読めばできる	5	1	6.3%	4	28.6%	
自分の生活に身近なこと	11	7	43.8%	4	28.6%	
自分の経験で教えられる	19	9	56.3%	10	71.4%	NS
中高まじめに保健を受けてきた	7	4	25.0%	3	21.4%	
大学の授業が役に立つ	15	7	43.8%	8	57.1%	

＊自信あり群は2020年度が16名、2022年度が14名、表中の割合は各年度の人数比。NS：not significant.

れ 16 名（23.2%）、35 名（37.6%）であり調整済み残差より 2020 年度はその割合が少なく、2022 年度はその割合が多い傾向にあった（表 3）。

自信がある、少しあると回答した者を合わせた 30 名を対象に、その理由（複数選択可）について 2020 年度と 2022 年度の結果を表 4 に示す。年度間の回答比率に差はなかった。自分の経験で教えることができると考えている者、大学の授業が役に立つと考えている者が両年度において約半数いることが明らかとなった。

自信がない、少しないと回答した者を合わせた 132 名を対象に、その理由（複数選択可）について 2020 年度と 2022 年度の結果を表 5 に示す。年度間の回答比率に差はなかった。一度も保健授業をしたことがないという経験不足を理由にしていることが明らかとなった。

保健授業実施に対する自信の程度と保健授業のイメージの関係性を確認するために、2020 年度と 2022 年度に分けてクロス表を作成し分析した結果、2022 年は自信の程度とイメージにおいて回答比率に有意な差がある項目がなかった。2020 年度には以下 5 項目に差があった（表 6）。保健授業が自分の生活や生きていく上で必要と捉えている者は自信が少しある者、少しない者ともに全員がそうであると回答していたが、自信がない者 16 名中 2 名は生活に必要がないと回答ており特徴的であった。自分と向き合うことができると捉えている者は自信が少しあるとしている者 16 名中 13 名（81.3%）と多く、自信がないとしている者 16 名中 3 名（18.8%）しかおらず特徴的であった。先生が体験談等を聞かせてくれたと捉えている者は自信が少しあるとしている者 16 名中 13 名（81.3%）と多く、自信がないとしている者 16 名中 3 名（18.8%）しかおらず特徴的であった。授業が楽しかったと捉えている者は自信が少しあるとしている者 16 名中 13 名（81.3%）と多く特徴的であった。授業がつまらなかったと捉えている者は自信が少しあるとしている者 16 名中 1 名（6.3%）しかおらず特徴的であった。

表 5　教育実習での保健授業実施に自信がない者の理由

	総数	2020年度（53人）		2022年度（79人）		χ^2検定
		度数	%	度数	%	
何を教えてよいかわからない	44	14	26.4%	30	38.0%	
保健授業のことを考えていなかった	40	13	24.5%	27	34.2%	
一度も授業をしたことがない	96	43	81.1%	53	67.1%	NS
中高の保健がつまらなかった	18	8	15.1%	10	12.7%	
中高まじめに保健を受けなかった	13	6	11.3%	7	8.9%	

＊自信なし群は2020年度が53名、2022年度が79名、表中の割合は各年度の人数比。NS：not significant.

表 6　2020 年度における自信と保健授業のイメージ（回答比率に差が出た項目のみ）

	総数	少しある（16人）			少しない（37人）			ない（16人）		
		度数	%	調整済み残差	度数	%	調整済み残差	度数	%	調整済み残差
自分の生活や生きていく上で必要	67	16	100.0%	0.8	37	100.0%	1.5	14	87.5%	-2.6
自分と向き合うことができる	33	13	81.3%	3.1	17	45.9%	-0.3	3	18.8%	-2.7
先生が体験談など聞かせてくれた	38	13	81.3%	2.4	22	59.5%	0.8	3	18.8%	-3.3
授業が楽しかった	39	14	87.5%	2.9	18	48.6%	-1.4	7	43.8%	-1.2
授業がつまらなかった	24	1	6.3%	-2.7	15	40.5%	1.1	8	50.0%	1.5

表 7　中高生時代に受けた保健授業のイメージ

	総数	2020年度（69人）		2022年度（93人）		χ^2検定
		度数	%	度数	%	
自分の生活や生きていく上で必要	158	67	97.1%	91	97.8%	NS
雨など体育ができない時に実施	109	50	72.5%	59	63.4%	NS
テスト前に暗記するために実施	96	42	60.9%	54	58.7%	NS
自分と向き合うことができる	96	33	47.8%	63	70.0%	P＜0.05
ビデオを見て学習した	98	33	47.8%	65	69.9%	P＜0.05
グループ学習で他者の考え方を知ることができた	85	26	37.7%	59	63.4%	P＜0.05
授業中、寝ている人が多かった	86	38	55.1%	48	52.2%	NS
何をやったかほとんど覚えていない	27	11	15.9%	16	17.2%	NS
先生が体験談など聞かせてくれた	109	38	55.1%	71	76.3%	P＜0.05
先生が面倒そうに授業をしていた	24	12	17.4%	12	13.0%	NS
授業が楽しかった	94	39	56.5%	55	59.1%	NS
授業がつまらなかった	52	24	34.8%	28	30.4%	NS

NS：not significant.

4. 中高生時代に受けた保健授業のイメージについて

中高生時代受けた保健授業から、保健授業をどのようにイメージしているかについて表 7 に示す。自分の生活や生きていく上で必要と捉えている者は両年度の回答比率に差はなく、ともに極めて多数いた。雨など体育ができない時にやっていたと、いわゆる雨降り保健のイメージを持っている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 72.5%、2022 年度 63.4%であった。保健授業がテスト前に暗記するためにやっていたとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 60.9%、2022 年度 58.7%であった。保健授業を通して自分と向き合うことができるとイメージしている者は 2020 年度 47.8%であったが、2022 年度 70.0%と増加し、回答比率に有意な差が認められた。保健授業はビデオを視聴して学習していたとイメージしている者は 2020 年度 47.8%であったが、2022 年度 69.9%と増加し、回答比率に有意な差が認められた。グループ学習で他者の考え方を知ることができたとイメージしている者は 2020 年度 37.7%であったが、2022 年度 63.4%と増加し、回答比率に有意な差が認められた。保健授業中に寝ている人が多かったとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 55.1%、2022 年度 52.2%であった。保健授業で何をやったか覚えていないとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 15.9%、2022 年度 17.2%であった。保健授業で先生が体験談などを聞かせてくれたとイメージしている者は 2020 年度 55.1%であったが、2022 年度 76.3%と増加し、回答比率に有意な差が認められた。保健授業は先生が面倒そうに授業していたとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 17.4%、2022 年度 13.0%であった。保健授業が楽しかったとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 56.5%、2022 年度 59.1%であった。保健授業がつまらなかったとイメージしている者は両年度の回答比率に差はなく、2020 年度 34.8%、2022 年度 30.4%であった。

Ⅳ. 考察

この調査を実施した時期が大学 2 年生の 4 月であり、この時点では将来教職を志望している学生は 5 割弱であった。しかし、これまでの経験から、本学の保健体育免許取得希望者は学年が進むにつれ教職を目指す者は減少していくであろう。近年、教員志願者の減少が続き[9]、教職離れは社会的に深刻な問題となっている[10]。また、現時点で教職に就くことを不明としている者が約半数い

る。これらの学生の中には「免許だけは取っておこう」や「親に教職の授業くらい取っておきなさい」など消極的態度で授業に参加している学生が含まれている。さらに近年、様々なメディアやSNSを通じ、教職はブラックというイメージが学生に浸透している。今後の教職離れを防ぐために、教職科目の担当教員が教職の魅力を伝えていくこと[11]が必要である。さらに、学生にとっても興味関心が高まるような実践的授業の機会を増やし、学生の自己効力感を高める[12]工夫も必要である。

保健授業の重要性については、2020年度と2022年度の回答比率に差が出た。しかし、他教科より重要と考えている者と他教科と同様と考えている者との回答を合わせると、両年度約9割に達し、他教科ほど重要ではないと考えている者は1割に過ぎないことが明らかとなった。この点は岡山県に所在する2大学の教職科目履修ではない新入生883名を対象にした調査報告[13]と同様の傾向を示しており、保健授業を受ける側の生徒にとって教師が考えるほど保健授業そのもの対しては否定的なイメージ[14]は持っていないと考えられる。

本研究での質問紙調査は大学2年生時4月に実施したため、保健科教育に関する知識は全くない状態である。その上で保健授業をする自信の有無を問われたわけなので、その判断基準は中高生時に受けてきた保健授業の影響が少なからずあるものと考えられる。それを裏付けるように、少し自信があると回答した学生が2020年度約23%いたが、最も多かった理由に「自分の経験で教えられる」であった。つまり自信が少しあると回答した学生は、中高生時に受けてきた授業を参考にすればできるだろうと考えたのであろう。自信の程度と保健授業のイメージの関係性を確認したところ、2022年は回答比率に有意な差がある項目がなかったが、2020年度には5項目に差が認められた。自信が少しある学生の特徴として保健授業は、自分と向き合うことができ、先生が体験談などを聞かせてくれ、授業が楽しく、つまらないとは感じなかったというイメージを抱いていた。この調査では具体的に何が楽しかったのかについては聞いていないため不明である。しかし、保健授業実施に対する自信の根拠は中高生時代受けた保健授業が面白く、その印象が強く残っているため、それらを模倣すればできると考えていると推察できる。

最後に対象者が保健授業に対してどのようなイメージを持っているのかについて検討したい。年度に差がなくほとんどの学生は保健授業が自分の生活や生きていく上で必要なものと捉えている。しかし、いわゆる雨降り保健、テスト前だけの暗記保健のイメージも6〜7割と依然多くの学生が抱いている。この調査では中高生時代の保健授業という設定だったため、多くの学生は中学校時代の保健授業を想定しているのだが、大学2年生になった今でもその印象があるということは、今後、中学校教育現場における保健授業のあり方について議論していく必要があると考える。この問題点については以前からあり、中学校で教育実習を行った場合、保健授業を半数以上の学生が担当していない調査報告もある[15]。保健授業のイメージにおいて2020年度と2022年度を比較すると、保健授業は自分と向き合うことができる、ビデオを見て学習した、グループ学習で他者の考え方を知ることができた、先生が体験談を聞かせてくれた、の4項目でについて、いずれも2022年度が有意に増加していた。近年、保健授業が講義方式だけではなく生徒参加型[13]も増えていることが窺える。今後、大学における教科教育法（保健）の講義においてもICT活用[16][17]を含め様々な授業形態について紹介していく必要がある。

Ⅴ．結論

本研究では保健体育の教員免許取得を目指す学生を対象に、教職志望状況や保健授業のイメージについて調査を実施し、現状把握すると共に今後の大学における教科教育法の課題について検討していくことであった。その結果、以下の点が明らかとなった。

① 大学2年生4月の時点での教職志望者は5割弱であった。今後の教職志望離れを防ぐため、担当教員が教職の魅力を伝えていくことや興味関心が高まる実践的授業の機会を増やし、学生の自己効力感を高める工夫が必要である。

② 他教科と比べてみても保健授業の重要性について多くの学生が認識していた。

③ 大学2年生4月の時点で、教育実習の際、保健授業を実施することに対して約8割の学生は自信がないと回答している。しかし、約2割の学生は少し自信があると回答し、その自信の根拠となっているものは中高生の時に受けた保健授業の印象の強さが関係している。

④ 近年、学校教育現場における保健授業は講義方式だけではなく生徒参加型も増えていることが窺える。今後、大学での教科教育法（保健）においてもICT活用を含め様々な授業形態について取り扱っていかなければならない。

しかし、本研究は、ある年度（2020年度および2022

年度）のみの保健体育教員免許取得希望している大学2年生のみを対象としているため、今後、大学3年生、4年生に対して調査を実施し検討することで、課題及びその解決策などがより明確になると考える。

参考文献

1) 高等学校保健教育参考資料「改訂『生きる力』を育む高等学校保健教育の手引き」（PDF）. https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1371839.htm（閲覧日；2023年2月21日）.
2) 赤田信一、植田誠治、山本章、谷健二．中学校保健体育教師を対象とした保健授業の実施に関する調査研究（第1報）：保健授業をより円滑に実践するための教師のニーズと、そのサポート体制の構築に向けて．静岡大学教育学部研究報告．人文・社会科学篇51巻，133‐143，2001.
3) 中学校の保健学習を着実に推進するために．保健学習授業推進委員会平成 25 年度報告書（PDF）. https://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook_H250010/H250010.pdf（閲覧日；2023年2月21日）.
4) 中川明、高橋裕子．保健体育の教師はなぜ保健の授業が苦手なのか？－保健体育科専攻学生の教材・内容・授業感からの検討－．愛知教育大学保健体育講座研究紀要，35，63‐73，2010.
5) 大西努、田原陽介、梅嵜周毅．保健体育科教育実習生における不安と運動部活動との関係．環太平洋大学研究紀要7，269‐273，2013.
6) 下井倉ともみ、土橋一仁、松本伸示．理科を専攻としない学生を対象とした「小学校理科を教える自信」に関する調査－理科内容学の視点から－．科学教育研究38巻4号，238‐247，2014.
7) 山田浩平、河本祐佳．小学校教員志望者と養護教諭志望者の保健学習に対する意識の比較．愛知教育大学教育創造開発機構紀要4，105-113，2014.
8) 山田浩平、藤原朋香、山崎里紗．養護教諭志望者と保健体育科教諭志望者の保健学習に対する意識の比較．愛知教育大学教育創造開発機構紀要5，69-76，2015.
9) 質の高い教師の確保について．文部科学省総合教育政策局資料５（PDF）. https://www.mext.go.jp/content/20210517-mxt_zaimu-000014948_05.pdf（閲覧日；2023年2月21日）.
10) 教員採用選考試験の改善等の教育現場の諸課題について「都道府県・指定都市教育委員会教育長会議」で永岡大臣から説明．2022 年 9 月 29 日．https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2022/20220929_3.html（閲覧日；2023年2月21日）.
11) 佐々木顕彦．教職課程履修者の教職回避に関する調査研究－英文科の学生を対象に－．武庫川女子大学学校教育センター年報第4号，89‐101，2019.
12) 丸岡俊之．教職課程学生の教職志望意識の形成に及ぼす影響－教師効力感、自己効力感、教職興味の視点から－．近畿大学教育論叢第31巻第1号，53‐66，2019.
13) 島根三佳．高等学校科目「保健」に関する一考察－大学新入生の意識調査からの検討－．川崎医療福祉学会誌，Vol.10 No.1，137‐145，2000.
14) 田中滉至、山田浩平、古田真司．保健学習における小学校・中学校・高等学校教諭の意識．東海学校保健研究，40（1），75‐88，2016.
15) 大窄貴史、吉田博紀、家田重晴、勝亦紘一．保健体育科教育実習における保健授業の担当時間及び担当分野について．中京大学体育論叢，46－2，99-113，2005.
16) 事前の学習課題を設定した中学校の保健授業の実践的研究－アクティブ・ラーニングの効果的な実施を目指した試み－．吉本篤史、久保元芳、鈴木智喜、加賀美愛．宇都宮大学教育学部教育実践紀要，第3号，183-190．2017.
17) 渡邊綾乃、宮本蘭子、木谷晋平、佐藤道子、吉野聡、上地勝．中学校保健体育における関心・意欲を高める保健授業の考案．茨城大学教育学部紀要（教育科学），68号，507-517．2019.